

DAY

新企画&現場で役立つ
レク情報など満載!

特集

生活機能の維持・向上に活かす

在宅アセスメント の実際



新連載

脳足トレーニング

介護職員向け

デイでの医療的ケア知識

「中・重度認知症」の方への環境の工夫

効果の高い

おすすめ疾患別トレーニング

別売

4月号
対応版

お役立ち
ツールCD

定価600円
(+税、送料別) 発売中

制作人形／石井美千子
(タイトル：三輪車)

人間だもの

第1回 “余命”ほどいい加減なものは無い

私は医者になって30年、56歳の尼崎の町医者です。外来も在宅も行う、なんでも屋です。今回からしばらく、本誌に連載させて頂くことになりました。よろしくお願ひ致します。

気持ちはまだ若いつもりですが、体は年々衰え、高齢者の気持ちもかなり分かる年齢になりました。自分自身も「あと何年生きられるのだろう」なんて計算することもあります。人生は無限のように感じていた20代がウソのようです。年間100人近い看取りをして、これまでに2千人以上の死亡診断書を書いてきた後遺症でしょうか。

しかし“余命”ほど当てにならないものはありません。医者は自分の経験から患者に余命を伝えているだけで、確固たる根拠があるわけではありません。「老衰であと1時間」と告げられた途端に元気になり、その後3年、生きた方がいました。一方、「末期がんで余命3ヶ月」と説明を受けた1時間後に亡くなられた方もいました。テレビで「私はがんセンターの医者に末期がんで余命6ヶ月と宣告されて8年経つけど、この通り元気です！」と明るく語る女性を見ました。このように、“余命”ほどいい加減なものはありません。だから、私は余命を聞かれても、まずは「分からない」と正直に言います。看取りが近いと感じたら、家族にだけは自分の予想を伝えますが、「私の余命予測はよく外れますから」と必ず

フォローを入れます。たまに本人に迫られることもありますが、「私のほうが先に死ぬかも。その時は、葬式に来てくれる？」と聞き返すと、患者さんはキヨトンとされます。これは冗談ではなく、私の本心です。

余命予測より、今日1日をどう楽しく生きるかが何より大切。まさに「今を生きる」。今日1日を楽しく笑えたら、もう何も言うことはありません。在宅患者さんとそんなことを言い合って、笑い続けてはや20年。こんなのんきな生活がいつまで続くかお互い分かりませんが、とりあえず笑おう。そんなやり取りをしています。ちなみにデイサービスから帰って来た患者さんに会うと、いつもみな笑っています。



長尾クリニック院長
長尾 和宏 ながおかずひろ

1984年東京医科大学卒業、大阪大学第二内科入局、1995年兵庫県尼崎市で開業、外来診療と在宅医療に従事
日本ホスピス在宅研究会理事、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授(高齢総合診療科)、「病院でも家でも満足して大往生する101のコツ」など著書多数